

上山の魅力を見直し

慶応大生がフィールドワーク

このうち親子2代で営む自転車店を取材したグループは「気付けば同じものを愛していた」とキャッチコピーを

発表した。21日に農家やそば店、木工職人、ウオーキングガイドなどを取材し、それぞれポスターを制作。22日にはポスターを基にシヨッピングプラザ・カミンでプレゼンテーションを行い、学生の中から見た上山の魅力を発表した。

成果、ポスターに表現



フィールドワークの成果をポスターにし、上山の魅力について発表する慶応大の学生たち
＝上山市・カミン

農家や商店主 11カ所訪れ交流

地域の商店経営者や農家などとの交流を通してまちの魅力を見直し、慶応大環境情報学部が21、22日、上山市内でフィールドワークを行った。グループごとに計11カ所を訪れ、取材対象となった市民の仕事への熱意やまちづくりへの思い、生きがいなどを聞き取り調査し、その成果をポスターで表現した。

同学部の学生や大学院生ら25人が参加。人々が集う「場所」を成り立たせる要件について、現地でのコミュニケーションを通して考察する「場のチカラ・プロジェクト」と題した研究の一環として来県した。2、3人のグループに分かれ、21日に農家やそば店主、木工職人、ウオーキングガイドなどを取材し、それぞれポスターを制作。22日にはポスターを基にシヨッピングプラザ・カミンでプレゼンテーションを行い、学生の中から見た上山の魅力を発表した。

の姿勢を「愉(たの)しむ」という言葉で表し、「少年のよくな志を持って挑戦し続ける姿が印象的だった」と説明した。

指導する加藤文俊教授は「まちづくりは簡単なことではないが、地域が外からどのように見えるかに気付いてもよければ、地域づくりの入り口が見えてくる」と総括した。ポスターは30日までカミンに展示している。